
雨上がりのイタズラ。 沖/神

(*ノ)ノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨上がりのイタズラ。 沖ノ神

【Nコード】

N4732F

【作者名】

(*ノ)ノ

【あらすじ】

沖田ミツバが死んでから数日が経った。しかし沖田総悟は大切な人を失った悲しみを断ち切れなかった。そこで神楽が彼を勇気付けるが……？

（前書き）

*これは『ミツバ編』の直後のお話となっています。
お手数ですが、『ミツバ編』をご覧になってから
読んで頂く事をお勧めいたします。

「サド……。いくらお前がバカでも風邪引くアル。」

大江戸公園に神楽は沖田と一緒に居た。今は雨が降っているので、神楽は傘をさしている。

だが沖田は傘をさしていない。ずっと背を向けて下を見ている。

「サド？聞ってるアルか？」

「チャイナか……。」

ゆつくりと振り返り、神楽の目を見る沖田。

その目からは雫がこぼれていた。おそらく雨なのだろうが、神楽はこんな事を言った。

「お前……泣いてるアルか？」

神楽は沖田に近寄った。

「バーカ。雨だよ……。」

自分の前髪をクシャクシャにしながら、沖田は悲しそうに返事をする。

「無理すんな。」

神楽は傘を沖田の頭上に差し出した。

「無理すんなヨ。お前はいつもそうやって一人で悩んで……。」

もう少し周りを頼ってもいいアル。お前は一人じゃないネ。」

しばらく沈黙が続いた。

聞こえてくるのは雨の落ちる音だけ。

そこで沖田が口を開いた。

「神様は残酷でイ。俺から世界で一番大切な人を奪っていきやがった。…………でも」

「…………でも？」

「今度はそうさせない。」

「お前、何言って——」

神楽は沖田に抱き寄せられた。驚きで傘を地面に落としてしまった。

「な、なにするアル?!」

「神樂。お前だけは……お前だけは消えないでくれ。」

そう言つて、沖田はぎゅっと力を込めた。

神樂はそれを感じると、体中の力が抜けていくのがわかった。

そして、しばらく二人は雨の中抱き合った。

しばらくして、沖田は神樂を離れた。

その時、神樂は自分がさっきまで何をしていたのかを思い出して、赤面した。

「どうした？ 顔赤いぜ？」

「お、お前のせいだヨ！」

「つか、いきなり抱き付くなんて反則だろ！」

『プツ．．．．』

神樂のあわてた様子に沖田は吹いてしまった。

それを見た神樂は．．．．

「お前、やっと笑ったネ。」

自然と笑顔になった。

彼はミツバが死んでから、あまり笑わなくなった。それを神樂は悟っていた。

「お前のおかげだ。だから．．．．恩返ししたいんですア。いいかい？」

「べ、別に私は何もしないアル。つか、恩返しって何？」

「目を閉じてくれればいい。後は任せろ。」

「おまつ！また抱きつくとかしないだろうナ？！」

「．．．．いいから。」

沖田は笑顔で言った。いつもよりもスッキリとした笑顔だった。それを見た神樂はしぶしぶ目を閉じる。その時、雨が止んだ。

二人を太陽の温かい光が優しく包み込む。

沖田は一瞬、空を仰いだ。

さつきとは違って、晴れ間が広がっていく。

そして前に向き直った。そこには口を尖らせながら、目をつぶって

いる神樂が居る。

（この鈍感娘。）

そう呟いて、沖田は神樂にイタズラをした。

世界で一番甘いイタズラ。

そして二人の時間が止まった。

そしてまたゆつくりと時間が流れ出した。沖田は神楽から唇を離れた。

「・・・・・・・・!!」

どんどん顔が赤くなっていく神楽。抱かれた時とは比べ物にならないほどに。

「はい、終わり。」

「お・・・・・・・・終わりじゃねえ！何してくれんだヨオオオ！」

「何って・・・・・・・・恩返し。嬉しくないんですかイ？」

「バカじゃねえの?!こんな悪ふざけ、嬉しくねえヨ！」

「悪ふざけ？お前・・・・・・・・まだわからねえのかよ。」

「・・・・・・・・は？」

沖田は小さくため息を吐いて、くるつと回ったと思うと歩き出した。

「ど、どこいく気だヨ?!」

「屯所でさア。俺だつて暇じゃねえんだ。」

「ちよっ！この仕返しは絶対するから覚えてるヨロシ!!」

神楽は精一杯叫んだが、そんな事は聞こえていないかのように、ヒラヒラと手を振って、沖田は歩いていつてしまった。

「どこまで勝手な奴だヨ……………」
「どこまで鈍感な女でイ……………」

二人がこの台詞を同時にこぼしたのは、誰も知らない事である。

（後書き）

みなさん、どうでしたか？この作品は私の初投稿の作品です。
初めてにしては、結構よくできたと自己満足していますw
しかし、これ以上の作品をもっと作り上げて生きたいと思います。
そして、評価&感想を参考にさせていただきます。
どうか面倒くさいでしょうが、評価していただくと幸いです。
それでは皆さん、次回作で会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4732f/>

雨上がりのイタズラ。 沖/神

2010年10月25日02時04分発行